

# Campus

211

全大会の広報誌

Jan. 2017

## 絵本と子どもとの出会い

おとなが仕掛けた「読み聞かせ」

## 現実と仮想の境界線

ARとVRの未来

## ぐるっと紹介 地球学類

【連載特集】各学類・専門学群を知ろう！

## 全大会紹介・活動報告







実験について話す松村助教

「子どもに絵本を好きになってもらうためには、好みに合った絵本を与えることが大切だ。しかし、大人が一人ひとりの好みに合わせて絵本を選ぶことは難しい」と松村助教(図書館情報メディア系)は語る。松村助教は、子どもに合わせた絵本を選ぶ方法を研究している。

子どもに合わせた絵本を選ぶ方法と並行して、読み聞かせの方法も研究しているという。「読み聞かせの方法を考えるうえで、普段から読み聞かせを行う現場の人との意見交換は欠かせない」と松村助教は話す。現場の人は自分なりに良い読み聞かせを模索しているという。研究では、現場の人が行う方法を検証できることもある。「効果を学術的なデータで実証できれば、経験から確立した方法を、自信を持って続けられる。現場への情報提供となれば」と松村助教は言う。

## 読み聞かせと絵本を考える

～ 研究者の視点から ～

## 子どもに感想聞く? 聞かない?

読み聞かせの後、子どもに感想を聞くことは、子どもの想像力を制限するという説がある。その説が本当に正しいか検証した実験があるという。

読み聞かせ後に、感想を聞くグループと聞かないグループに分け、本の内容に関するテストを行った。その結果、感想を聞かなかったグループは想像力に関する項目の点数が高

く、感想を聞いたグループは内容理解に関する項目の点数が高い傾向が示された。

想像力を育てるという側面では感想は聞かない方がよいが、文章の理解力を育てるという側面では聞いた方がよい可能性があるという。「読み聞かせの目的に合わせて、感想を聞くか聞かないか考えることもよい」と松村助教は語る。

## 大きさに読む? 淡々と読む?

絵本の読み方が、読み聞かせの効果にどう影響するかは分かっていない。あまりにも大きさに読むことはよくないと言われているが、それを検証した実験があるという。

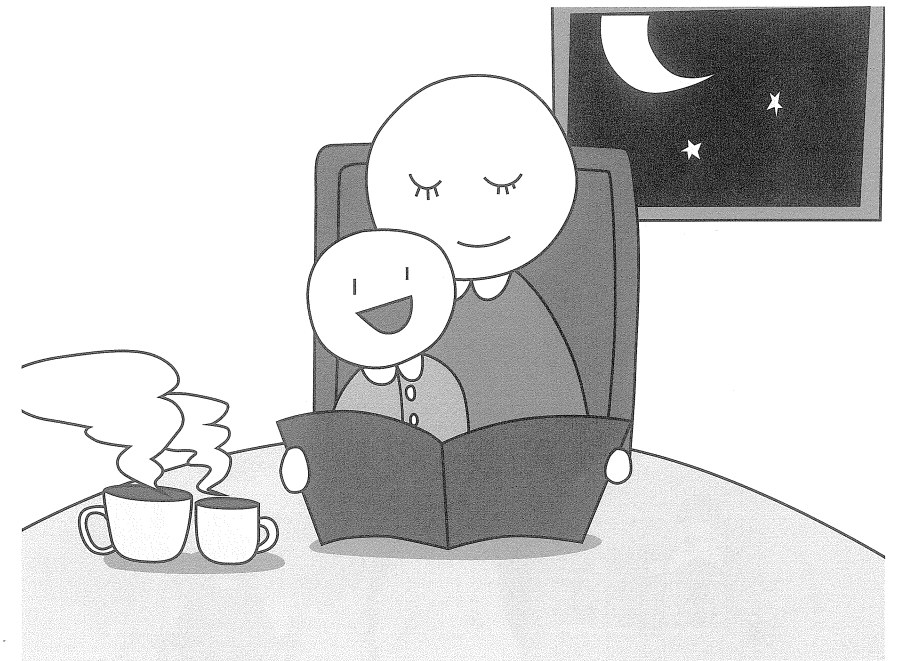
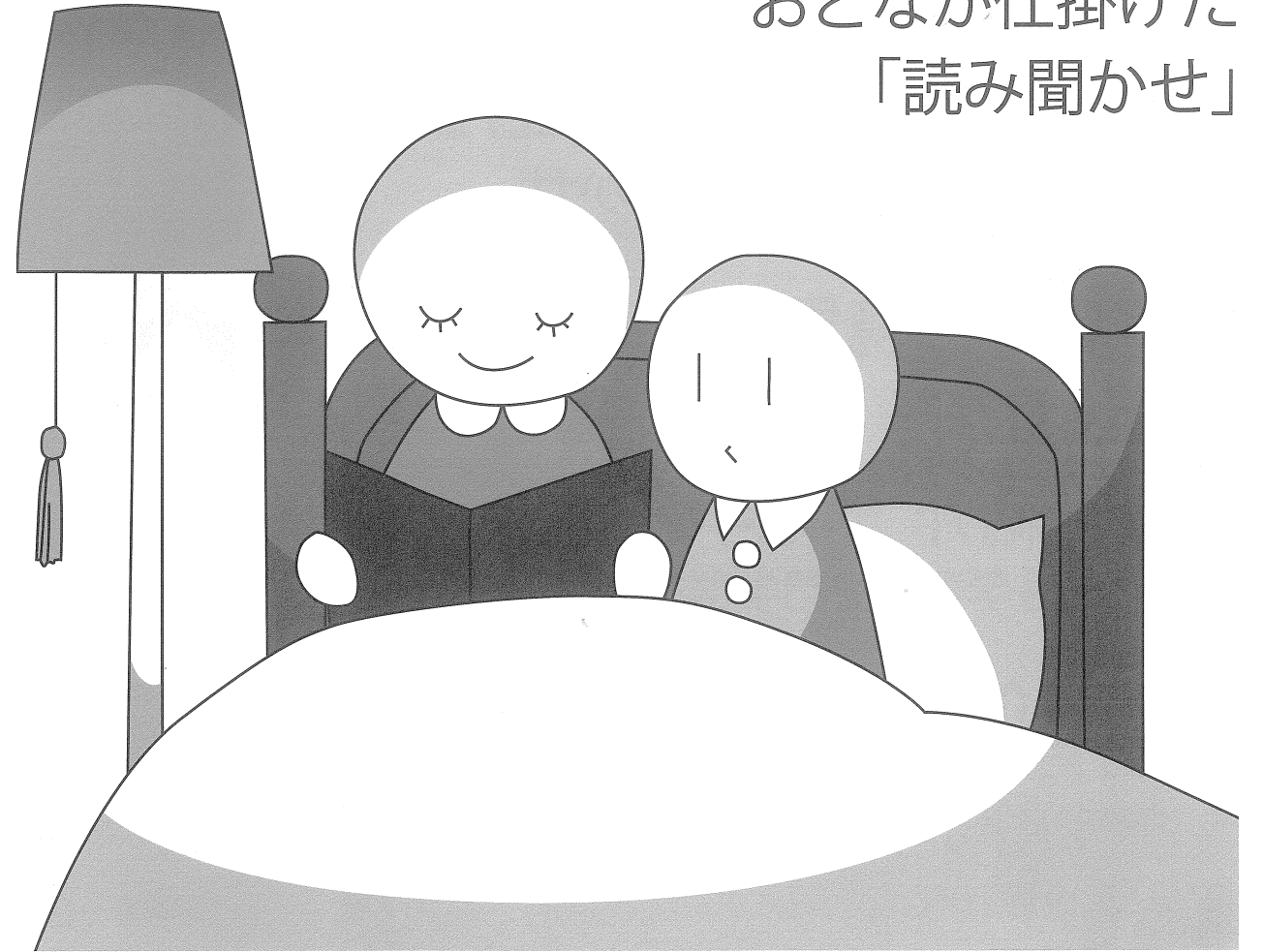
実験では、大きさに演じ分けて読み聞かせるグループと、淡々と読み聞かせるグループに分け、読み聞かせ後にテストを行った。結果、物語の理解においては差が出なかったが、心情を問う項目だけは大きさに演じ分けたグループの得点が低い傾向にあった。「極端な演じ分けをすることで、登場人物の

心情を物語の文脈からではなく、読み手の声色から間違って読み取った可能性がある」と松村助教は話す。

また、読み聞かせの後には、絵本に登場する3匹のお化けのうちのお化けが嫌いだったかも聞いた。淡々と読み聞かせたグループは好みが偏らなかつたが、大きさに読み聞かせたグループは特定のお化けが多くの子どもに嫌われた。「大きさに読むことは、絵本の登場人物の印象を操作してしまう可能性がある」

# 絵本と子どもとの出会い

## おとなが仕掛けた「読み聞かせ」



幼い頃、お気に入りの絵本を繰り返し読んでもらったことがある人も多いだろう。本特集では、読み聞かせに焦点を当てた。読み聞かせの教育的効果や、より子どもたちに楽しんでもらうための工夫について取り上げる。また、字の無い絵本や触って楽しむ絵本など、一風変わった絵本も紹介する。

私たちが成長した今、本特集を読むことでの懐郷とともに、改めて読み聞かせについて考えてみてはどうだろうか。

(編集人: 岡崎那菜、鈴木祐悟、宮下寛太、和田多香子)

# 図書館司書さんに聞いた！ 読み聞かせの「工夫」

絵本を手にとって  
もらうために

図書館での  
さまざまな催し

峯岸さん流  
読み聞かせの「コツ」

一般に図書館では、子供に絵本を手にとってもらうため、配置や展示方法を工夫している。その一つに、テーマ別の展示が挙げられる。例えば、9月には「十五夜・月見」をテーマに、関連する本を集めて展示を行った。絵本を探す子どもたちの興味や好奇心から、新たな学習のきっかけにしようという。また、「テーマ別に分けて展示することで、子どもたちには自分の中に新たな引き出しを作ってもらいたい」と峯岸さんは話す。

図書館では、本の貸し出しだけでなく、さまざまな催しを行っている。例えば読書会が挙げられる。ある本をテキストにし、それぞれの読んだ感想を共有する。同じ本でも人によって捉え方や感想が異なり、共有することで新しい視点や考え方を持つことができるという。

図書館では、子どもたちへの絵本の読み聞かせも行っている。峯岸さんは読み聞かせを行う際、いくつか心掛けていこうという。一つ目は、視線はなるべく同じ高さに合わせて、高目線から見下ろされると、怖がってしまう子どももいる。同じ目線で親しみを込めて話すようにしている。

三つ目は、声色をなるべく変化させないことだ。峯岸さんは絵本を絵画に例える。「絵本を絵画そのもの、読み手を額縁だと考えている。額縁ばかり目立っても、作品の良さが伝わらない。これは絵本の読み聞かせにも共通する」と峯岸さんは語る。絵本の印象だけが残るよう、読み手があまり目立たないように心掛けていく。

また、作家の講演会や半世紀前に流行した曲の試聴会、工作教室などを催すところもある。「幅広い世代を対象にすることで、図書館に来てもらうきっかけを作ること大事だ」

二つ目は、絵本の選りだ。どのような絵本を選ぶかで、読み聞かせの質がほとんど決まってしまうという。「子どもたちは絵から大量の情報を受け取るため、まずは絵だけを見て、話の全体像を想像できる本を選ぶ。さらに絵と文章のバランスや、絵に合った文章表現がなされているかに注目する」

峯岸さんにとって、読み聞かせは種まきだという。「子どもたちが絵本を読んだとき、さまざまな感情の種を持つ。それが芽を出し、子どもたちの視野を広げる助けになってくれれば」

## 絵から広がる想像

# 言葉のない絵本

絵本は、言葉と絵から成り立つことが多いが、言葉のない絵本も存在する。言葉のない絵本について研究する山本美希助教（芸術系）は、「言葉で補えない難しさはあるが、無いからこそ読む人の想像に委ねられる幅広い解釈を可能にし、思考を広げられる」と話す。

学生時代、山本助教は、一枚の絵を作りこむより複数の絵をつなげて表現することに興味を持ち、言葉のない絵本にたどり着いたという。

卒業した後は漫画家となって作品を発表する一方、様々な観点から絵本・マンガについて追求したいという気持ちが大

きくなり、大学では言葉のない絵本もとに絵だけで伝える表現方法を研究している。「絵で様々なことを自在に表現してみせる、言葉のない絵本の面白さと可能性に強く心惹かれた」

言葉のない絵本は、日本よりも海外で親しまれているという。例えば、アメリカだ。移民が多い地域では、子どもの語学力にばらつきがあるため、言葉のない絵本が活用されることがあるという。「日本にも、外国人の子どもが増えつつある。言葉のない絵本が役立つのでは」

また、大人にこそ言葉のない絵本を楽しんでほしいという。海外では、贈り物

で送られることもある。「言葉のない絵本では、言葉では表せない深い感情を表そうとする。こうした絵本の持つシンプルかつ奥深い面白さに気付いてほしい」



言葉のない絵本の魅力を語る山本助教

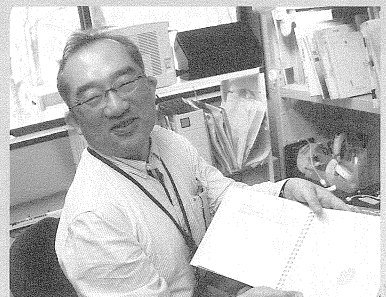
## 触って楽しむ

# 触察絵本の世界

触察絵本は、視覚に障害のある子どもたちも楽しめるように作られた絵本だ。絵を見て物語を読むだけでなく、触って楽しめるような工夫がされている。

触察絵本には、さまざまな種類がある。例えば点字教科書などにも使われる立体コピーや、紫外線を当てることによって浮き上がるUVインクを使ったものだ。さらに、物語の中にわらが出てくれば、実際のわらを貼り付けてあるというような、実物素材の張り合わせのものもある。「触察絵本の中でもおすすめの一冊は、『これ、なあに？』（さくしまいくえ訳）だ」と佐島毅准教授（障害科学域）は話す。物語の進行を指でたどって追えるのが良いという。

ボランティアの手でつくられることも多い触察絵本だが、視覚障害のない者が視覚的な判断で作ると、子どもたちにとっては読みにくいこともあるという。そのため、情報量の制限や、情報の配置に気をつける必要がある。読者は年少児が多く、複雑なものの理解が難しいことが理由だ。「触って楽しいと思ってもらうことが最も大切だ」と山田毅教諭（附属視覚特別支援学校）は話す。



触察絵本について話す佐島准教授



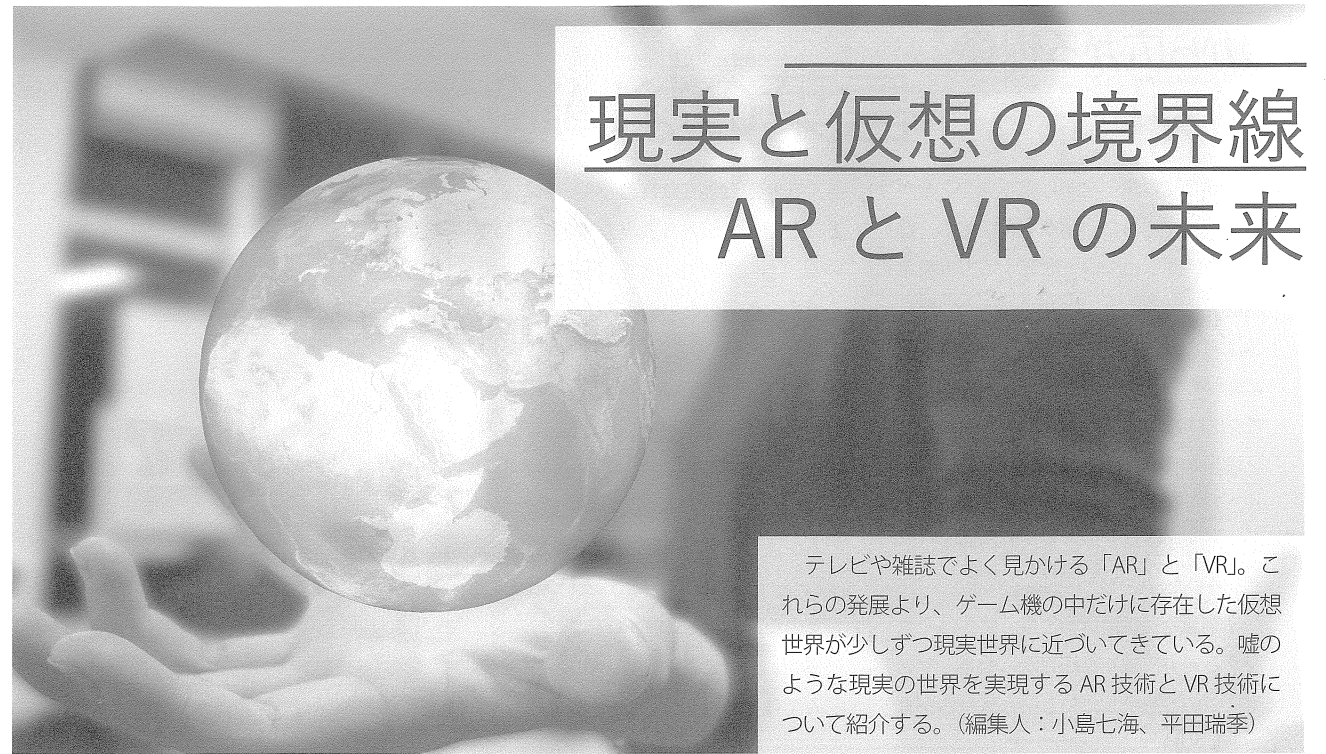
視覚特別支援学校の山田教諭

絵本を触って読む経験は、視覚障害のある子どもたちの言語発達に役立つという。「子どもたちは、言葉の具体的なイメージを、実際に触った体験から得ている」と佐島准教授は語る。

また、触覚が最も育ちやすいのは幼児期だという。幼い頃から触察絵本を読むことで、子どもたちはものを触って情報を得る能力を習得する。「その体験が小学校入学後の点字の使用など、触覚を通した学習につながれば」と山田教諭は話す。



# 現実と仮想の境界線 AR と VR の未来



テレビや雑誌でよく見かける「AR」と「VR」。これらの発展より、ゲーム機の中だけに存在した仮想世界が少しずつ現実世界に近づいてきている。嘘のような現実の世界を実現するAR技術とVR技術について紹介する。(編集人：小島七海、平田瑞季)

## コンピューターに操られる

### ヘッドマウントディスプレイを用いた研究

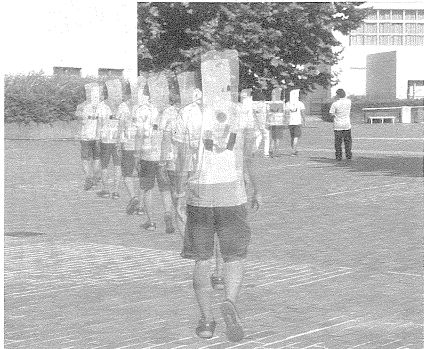
落合陽一助教(図書館情報メディア系)の所属するデジタルネイチャー研究室では、ARやVRを用いた研究を行っている。「Optical Marionette」[1]は、視覚的な錯覚を用いて人間の歩行方向を無意識的に誘導しようという実験だ。現在のナビゲーションシステムは、コンピューターなどが情報を提示し、それを人間が認識してルートをたどるものだ。このシステムにはいくつかの問題点がある。一つ目は、自分がいる位置が地図上のどこを示しているか認識できなければ、活用できない

ことだ。二つ目は、自分がコンピューターの提示する位置にいるか判断が付きにくいことだ。

ナビゲーションシステムに適用するため、「Optical Marionette」の実験を行った。ヘッドマウントディスプレイを装着した歩行者に現実とずれた映像を見せ、直進させた。その結果、コンピューターの映像に誘導され、自分の意図する方向とは異なる方向へ進んだ。この実験より、ARを用いて人間を誘導することが可能であるという結果が得られた。



ヘッドマウントディスプレイを装着している



歩く姿を連続撮影した。直進せず右にずれている

[1] Akira Ishii et al. Optical Marionette: Graphical Manipulation of Human's Walking Direction. UIST 2016, ACM, pp.705-716

## VR は世界をどう変える 近未来の生活とは



落合 陽一  
(Ochiai Yoichi)  
メディア創造分野 助教  
メディアアーティスト

人間、自然、デジタルリソース(コンピューター)が互いの線引きを越えてつながり合う世界である「デジタルネイチャー」を提唱した。人間とメディアの自然な連携を目指し研究を進める。

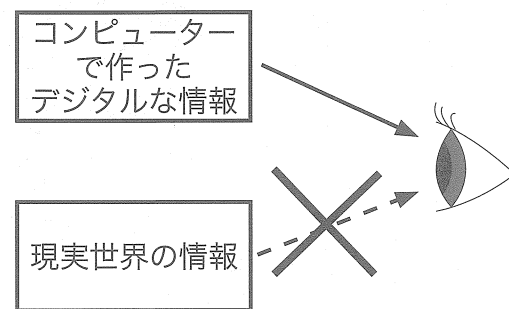
スマートフォンは少し前まで目新しい技術として注目されていたが、今では生活に欠かせないものになっている。「VRでも同じことが起きるのではないか」と落合助教は語る。VRが利用されると、生活の場面がいくつか変わると予想される。その一つに会議があるという。「決

まった場所に集まらなければいけない会議なんて面倒だ」と落合助教は話す。VRを利用し、別の場所においても仮想空間を共有できれば、集まる必要がなくなる。例として分かりやすいのが国会だ。地方から東京に通わなくても国会が開けるため、時間も費用も節約できる。「直接会わなければ議員の採み合いも起きないだろう」

さらに、教育現場でも活用できるという。「教科書の写真を見るよりも、VRで博物館を体験する方が立体的に把握でき理解が深まる」と落合助教は語る。他にも介護の研修など「体験する方が説明を受けるより早い」とされるものは、VRで体験しながら説明を受けることができる。

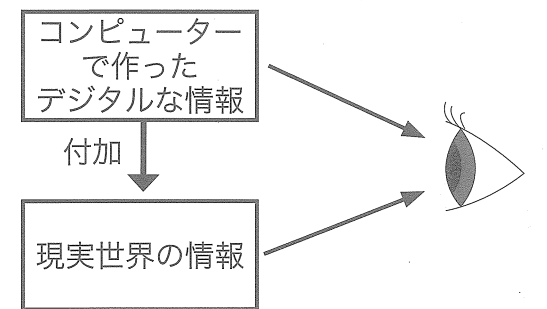
VRが仮想空間において実現できないものが触覚だ。「普段の生活で何かに触れることが多いからこそ、服の質感や風を受けた感覚などの触覚は重要だ」と落合助教は話す。再現できれば仮想世界と現実世界の距離が縮まるはずだという。どこまで触覚を再現できるかが、研究の課題だ。「VR技術が私たちの生活に欠かせないものになるには5年ほどかかると思う。スマートフォンが普及するまでそれくらいかかった。VRも同じくらいだと思う」

## VR Virtual Reality



VRは「仮想現実」と呼ばれ、コンピューターで作った仮想空間に入り込むことで、自宅にいながら旅行を擬似的に体験できたり、会議に出席できたりすると考えられている。2016年には、初めてVR技術を使用した家庭用ゲーム機が発売された。

## AR Augmented Reality



ARは「拡張現実」と呼ばれ、現実世界にデジタルの情報を重ねる技術だ。スマートフォンなどのカメラで映した映像に、コンピューターで作成した情報を付加する。デジタルの情報を現実世界に補うことで、現実がより便利になる。星空をスマートフォンで映した際に、それがどんな星座であるかを画面に表示させるアプリケーションや、好きな服を画面上で試着できるアプリケーションなどが代表的だ。



# ぐるっと紹介 地球科学

## 【連載特集】各学類・専門学群を知ろう！

今回の連載特集では、地球学類を取り上げる。この学類で扱うのは、宇宙や天体の研究ではなく、単なる地理や地学でもない。「地球科学」だ。地球上のあらゆる現象を対象にしており、多様な研究分野を含むこの学問。特集では幅広い地球科学をぐるりと紹介すべく、人文地理、大気科学、地層学と特色の異なる3つの分野を取り上げた。(編集人:石川貴詞、小松崎麻緒、宮内優衣)

### ○「地球科学」とは

地球学類では、「地球科学」という学問分野を扱う。地球上では、過去・現在とさまざまな現象が起きている。46億年前に地球が誕生して以来、溶岩が冷え、海と陸地ができ、大陸が動き、生物が繁栄してきた。

現在も地球の表層では地殻が変動し、地震や火山活動が起こっている。表層から20キロメートル上空では、雲が発生し気候変化をもたらす。地球は水の惑星だが、水は、海や川、地下とさまざまな場所を巡る。さらに地球上では、人間が地域ごとに自然環境に適応して活動している。森林や海などの自然は、放射性物質の影響で変化する。

地球上で起る現象を、それぞれのつながりを捉えて研究するのが、地球科学である。

### ○2専攻12分野

地球科学が研究の対象とする現象は幅広く、地球学類では2専攻12分野がある。地球環境学専攻には、現在の地球表層での現象を研究する分野が集まる。人文地理、地誌学、地形学、水門科学、大気科学、環境動態の6つだ。

一方、地球進化学専攻に属する分野は、過去の地球表層と内部で起きた現象を研究する地史学・古生物学、地層学、構造地質学、鉱物学、地球資源科学の6つだ。今回は、人文地理と大気科学、地層学の先生方に、研究の例と専門分野について話を聞いた。

また、地球科学では現地調査が必須であり、「巡検」と呼ばれる野外実験や野外実習が多くある。記事では、この「巡検」も紹介する。

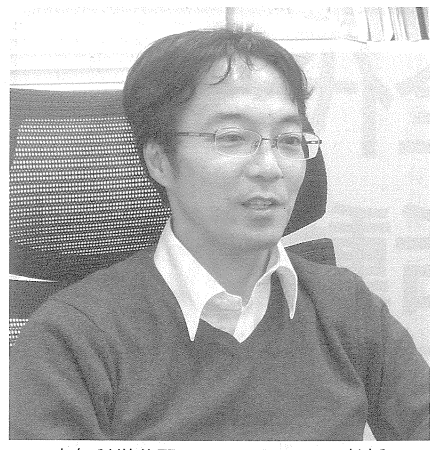
## 大気科学分野

### 研究 気候の地域性、特有性の謎を解く

都市ではヒートアイランド現象が起き、山ふもとではフェーン現象が起る。「こうした特徴的な気候を地形や風の流れから研究している」と日下博幸教授(生命環境学系)は語る。

研究の際には、まず現地で風向きや地形を調査し、気候の成因を予想する。地形と風の間を調査するために、実際の地形を改造することは不可能なため、コンピュータシミュレーションで擬似的な地形と気象を作り実験する。成因を突き止めれば、風力発電に適した場所を発見することができる。

○ヒートアイランド現象  
都市の気温が周辺地域と比べて高くなること  
○フェーン現象  
山から吹き下ろす熱く乾燥した風により、ふもとの気温が上昇すること



大気科学分野について語る日下教授

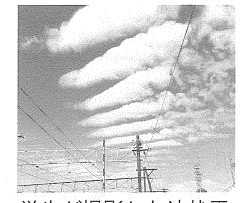
### 分野 規模の異なる対象を共に研究している

大気科学分野では、気象現象を観測し、その成因を解明する。このとき人文科学的な視点で調査を行う「地理学」的手法と数理学的な視点で考察を行う「物理学」的手法の二つがあり、一見異なる考え方が、相互に補完し合う関係にあるという。

大気科学の研究では地球規模の気候も、町村規模の気候も扱う。「筑波大学のように、取り扱う規模が異なる研究が並存している大学は全国的にも珍しい」と日下教授は語る。

### 巡検紹介②「大気科学野外実験A」(地球学類開設) 山地で気象観測、富山へ

2016年度の夏には富山県で巡検が行われた。富山県は北アルプスの北側に位置し、山岳部と平野部での観測を共に行うことができる。谷風の観測や山に登りながらの気温変化の観測を行った。幸運なことに、波状雲やケルビン・ヘルムホルツ波といった滅多に発生しない雲を見ることができたという。



学生が撮影した波状雲

## 人文地理分野

### 研究 アニメ作品の「聖地化」 地域とのかかわりを探る

松井圭介教授は、アニメ作品の舞台となった地域の「聖地化」を研究している。ファンが作品の舞台となった地域に足を運ぶことを、宗教になぞらえ「聖地巡礼」と呼ぶ。アニメ作品と宗教には共通点があるという。物語の世界観が、人々を引き込むことだ。「特にアニメ作品はメディアを介して発信されるため、多くの人に世界観の魅力が伝わる」と松井教授は話す。

「聖地化」には、地域の活性化という利点がある。一方で、地域が急な観光化や流行の衰退に臨機応変な対応ができないという問題点もあるという。「人にとって、場所が持つ価値とは何かを捉えていきたい」



「聖地巡礼」を解説する松井教授

### 分野 フィールドワークから 地域の個性を知る

地球学類の人文地理分野では、地域文化の研究を地理や地学の手法を用いて行う。主な研究方法はフィールドワークだ。仮説を元に、聞き取り調査を行う。結果を分析し、地図化することで、地域の文化的な特色を明らかにする。「現地に赴き、現地の人に話を聞き、地域の個性を知る。フィールドワークを通して自分の中で理解が得られるのが、研究の醍醐味だ」と松井教授は話す。

「人文地理を学ぶ人には、旅行好きが多い。地域に赴き、食や風景から風土を体感することは楽しい」と松井教授は話す。自分の好きなことを研究できるのも、人文地理の魅力だという。

### 巡検紹介①「文化地理学野外実習I」(比較文化学類開設) 島原半島で調査、長崎へ

2016年度は、長崎県の島原半島で3泊4日の巡検が行われた。学生はグループに分かれ、農村や交通、商業といったテーマに沿い、調査計画を立て、聞き取り調査を行った。「自らの目で地域を見て、地元の人のお話に耳を傾ける経験が大切だ」

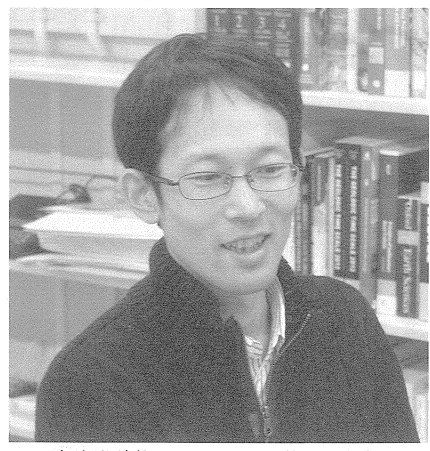
## 地層学分野

### 研究 数千年前の地震・津波を 地層から正確に知る

東北地方では、869年にも大地震があった。地震の規模や津波の被害範囲は、2010年に明らかになった。1年後に起きた東日本大震災は、同程度の規模だったという。

「数千年前の地震や津波の情報、地層に記録されている」と藤野滋弘准教授(生命環境学系)は話す。津波により海底の砂が陸地へ運ばれると、厚さ数センチの層ができる。津波堆積物と呼ばれるこの層は、過去に津波があった証だ。調査すれば、地震の発生時期や津波の被害範囲が分かる。

今後大地震が起こるとされる南海トラフ沿岸にも、津波堆積物がある。藤野准教授は現在、津波の被害範囲を調査している。「過去の情報が分かれば、未来の災害に備えられる」



津波堆積物について話す藤野准教授

### 分野 現地調査と科学分析 地層に残った記録を読む

地層学の分野では、地層を分析し、海の発生や大陸の移動といった数億年前の出来事も明らかにする。「地層は、地球の歴史の記録媒体だ」と藤野准教授は話す。

地層の研究は、野外調査から始まる。目的の地層を探するため、数か月をかけた調査し、時には海外へ出向くこともある。「大きな地球を研究するには、小さな人間は歩き回ることができない」

採取した岩石や化石は研究室で分析を行い、種類や年代を特定する。岩石や化石の情報から、地層がいつどうやって出来たかわかる。「研究には、現地調査と研究室での分析、両方が求められる」

### 巡検紹介③「地球進化科学野外実験II」(生命環境科学研究科開設) 宮古層群を観察、岩手へ

2016年度は、岩手県で巡検が行われた。目的地は「宮古層群」。約1億1,000万年前の地層と化石が鮮明に観察できる場所だ。宮古層群が堆積した時代の地球は、現在とは様子が全く異なる。「調査すれば、当時の様子が分かる。まるで時間旅行のようだ」



# 全代会 活動報告

9月 29日  
市長懇  
第五回  
福利厚生委員会

10月 5日  
交通安全講習会

11月 9日  
クラ代議長懇親会

## 市長懇

日時…9月29日(水) 16時30分  
場所…つくば市役所  
出席…つくば市長、市の職員、  
全代会の構成員、他

### ●実施内容

「つくば市長と筑波大学学生との懇親会(市長懇)」は、つくば市と筑波大生が交流する場だ。年に一度開催され、今回で4回目となる。学生は全代会の構成員の他、学園祭実行委員会、つくば院生ネットワーク、インスタントパカンスプロジェクト、期日前投票プロジェクトの学生らが参加した。

今年度は例年より多くの学生が参加し、活発な議論が行われた。例えば、「つくば市には住民向けの掲示板が少ない」という話題には、市原健一前市長も関心を示した。また、学実委の委員長は、市原市長を学園祭に招待した。

「参加する学生が増えたのは良いことだ。参加した学生にとっても有意義な時間を過ごせたのでは」と、意見交換した市長(物理学科2年)は話す。



市の職員等と学生が懇談する様子

## 第五回福利厚生委員会

日時…9月29日(水) 11時10分  
場所…総合研究棟  
A棟107プレゼンルーム  
出席…学生生活課支援室長、  
生活環境委員、他

### ●実施内容

福利厚生委員会とは、食堂や売店といった福利厚生施設の運営に、利用者の意向を反映させるための組織だ。教職員や学生生活課の職員、生活環境委員会の委員などが所属し、年に数回会議を開催している。

第五回福利厚生委員会では、主に学内へのキッチンカー導入に関して話し合われた。学内の食堂をより学生に利用してもらえよう、第一エリア、医学エリア、体育エリア、春日エリアの4カ所にキッチンカーが出店している。日替わりメニューが入れ替わり、利用者の継続的な獲得を目指している。

また、キッチンカー導入後のアンケート実施に係る検討小委員会の設置についても話し合われ、生活環境委員会から3人選出された。キッチンカーの利用状況や、満足度について調査を行い、今後の継続に関する判断材料にする予定だ。



昨年度の福利厚生委員会の様子

## 第六回本会議

日時…10月19日(水) 18時30分  
場所…3A304  
出席…41人(選別2人)

### ●議題①

「平成27年度学園祭実行計画書」追加提出分に関する要請

承認…41  
否認…0  
保留…0

↓全会一致で可決

### ●議題②について

第四回本会議で可決された「学園祭実行計画書」からの変更点や、追加事項が適切かどうか決を採った。

### ●議題③

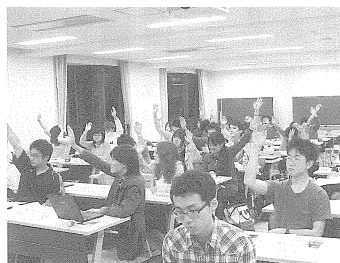
「平成29年度監察役選出について」

承認…41  
否認…0  
保留…0

↓全会一致で可決

### ●議題④について

全代会に不信任案が提出されたときの対応や、議長選挙が公正に行われているかを監察する役割として監察役が設置されている。平成29年度監察役として、島江彩加(社会学類2年)と野崎凌太(比較文化学類2年)が選出された。



第六回本会議の様子

## クラ代議長懇親会

日時…11月9日(水) 18時30分  
場所…1C504  
出席…議長団、各クラ代議長

### ●実施内容

クラス代表者会議(クラ代会)議長懇親会は、各クラ代会の議長間で交流を行うことで、各々のクラ代の活性化を図ることが目的だ。今回は自己紹介を行った後、クラ代会の役割や必要性について議論した。



議論を交わすクラ代議長ら

# Campus

全代会の広報誌  
Jan. 2017

No. 211  
2017年1月10日発行

## 記事制作者より

現役最後の発行。その感覚も無しに筆を進めてきた。3年間「Campus」の執筆に携わってきたことに対して、少しの満足感と虚無感が胸に残る。「Campus」が、手に取った人の学生生活を少しでもよりよいものに近づける雑誌で有り続けて嬉しい。今はそれだけだ。【宮内優衣】

「若い時の苦勞は買ってもせよ」一生縁のないと思っていた執筆の仕事。始めてから1年以上。何気なく見ている記事の一つ一つの執筆がこんなにも大変だと知らなかった。大学生は拘束されることが少なく、楽なことに流れがちだが、苦しい経験ほど長く残る。【宮下寛太】

## 表紙制作者より

私のデザイン案を元に、私が撮った写真で作られた今号の表紙。集大成のような、恵まれたこの表紙作成をもって、私の広報委員としての仕事は終了しました。導いてくれた先輩方、支えてくれた後輩たち、色々なことを一緒に乗り越えてきた同期、私たちが作ったCampusを手にとって下さった皆様に、心からの感謝を。【小野真実】

## 編集後記

面白いを届けたくてひたすら走り抜けてきた3年間、多くの出会いや学ぶ機会をくれたCampusには感謝の一言に尽きる。一学生の私が、取材という名目でたくさんの方の貴重な時間を頂き、様々な世界を見せていただいた。どの世界も素敵で、生き生きと話してくださる姿がとてつもなく好きだった。Campusを離れても、生き生きと面白いを繋げられる人でありたい。【平田瑞季】

3年間の旅程が終わった。ともに歩んだ仲間へ感謝を。悩み、苦しみ、楽しんだ日々がにぎやかなら。胸に灯った暖かな火を、別れの涙で消さないようにして。大事に抱えながら、新しい旅に出よう。【小松崎麻緒】

## STAFF

編集人	小松崎麻緒
発行人	小島七海
表紙デザイン案	小野真実
編集委員	青野綾介 水野真由美 石川貴嗣 宮内優衣 石田理紗 宮下寛太 石原琴子 和田多香子 上田悠登 岡崎那菜 小野真実 河出麻里奈 小島七海 小松崎麻緒 鈴木苑子 鈴見祐悟 平田瑞季 藤原律子

発行 全学学類・専門学群代表者会議  
広報委員会

<http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/>  
[zdk@stb.tsukuba.ac.jp](mailto:zdk@stb.tsukuba.ac.jp)

広報委員会では随時編集委員を募集しています。興味のある方は上記のメールアドレスまでご連絡ください。

## BACK NUMBER

- Campus No.206 2016/10/03  
特集：よい朝は良い睡眠から  
オリンピックから見る体専/全代会の2016年度全代会活動報告
- Campus No.209 2016/04/01  
特集：「学生」だからできること  
考えてみよう 自分の将来/ちょっとのぞき見 芸専生  
全代会活動報告
- Campus No.208 2015/01/07  
特集：悩みの取扱説明書  
「筑波」その名の変遷/こころを科学する学問  
全代会活動報告
- Campus No.207 2015/10/01  
特集：図書館の奥深き活用法  
その閃きが実現する?/ほんの小さな朝の幸せ  
全代会活動報告

バックナンバーは全代会室横(1学食堂内)のボックスで配布しています。ウェブ版「Campus」公開中 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/wiki/?Campus>